

# 古河公方足利義氏期の「連判衆」に関する一考察

——「飛鳥井自庵参上対面次第」の検討をふまえて——

久保賢司

## はじめに

室町・戦国期の東国において、一定の権力・権威として存在したものととして、古河公方の存在を挙げることができる。この古河公方に関しては、佐藤博信・市村高男・長塚孝等の諸氏の研究の蓄積があり、その実態解明がある一定レベルまで達していることは確かである。<sup>(1)</sup>しかし、未だ解明すべき点も存在すると言える。その一つに、最後の古河公方足利義氏期の古河公方奉行人の存在状況の検討というものが挙げられるだろう。特に天正年間に史料上の所見が頻繁となる「連判衆」<sup>(2)</sup>の実態解明は不可欠のものといえる。これまで「連判衆」についてはその職掌の検討が中心となり、また文字通り「連判衆」として一括して扱い、「連判衆」個々の身分序列等の検討が不十分であったことは否めないところである。<sup>(3)</sup>そこで本稿では、「連判衆」について天正前期という時点での、公方の御前における座次・相対的身分序列といったことを検討することにする。<sup>(4)</sup>またそ

の検討は、「喜連川家文書案」に収められている「飛鳥井自庵参上対面次第」と呼ばれる記録を分析して行なうことにする。

## 一 「飛鳥井自庵参上対面次第」の検討

ここでは、検討の中心となる「飛鳥井自庵参上対面次第」(以下「対面次第」と略す)そのものについて、書誌学的な検討とそれが検討に耐え得るものであるかをみていく。

この記録は、これまであまり利用されることなく、古河公方と京都との文化的交流の事例として利用されている程度である。<sup>(5)</sup>またこれを翻刻したものとして、『古河市史研究』第八号および『新編埼玉県史』資料編八等が挙げられるが、<sup>(6)</sup>それぞれいくつか字句の異同があるので、筆者自身の調査に基づき煩を厭わず全文を以下に掲げることにする。<sup>(7)</sup>

## 〈史料〉

飛鳥井自庵参上御対面之模様、五月五日之

晩酉刻より戌之尾迄祇候、其次第之事

初献 御引わたしの<sup>（足利義氏）</sup>柿、上意さまハ御四方にて

まゐる、自庵ハ三方にて被下候、拜被申様

例式平人ニ替奉敬御申候、御盞被召上候

時、御一礼アリ、御盃御くきやうし<sup>（直朝）</sup>さしおかれ、其

ま、自庵御給候而御立候を、一色月庵一さん給置

かれ候、

## 二献

先御盃参<sup>ル</sup>、其次<sup>ニ</sup>おり<sup>一合京庵、</sup>其次御

さかつき参、御一盞被召上、御二ツ目<sup>（合かつば串物）</sup>自庵被立

候て、おりの物御肴進上御申候而、同御酌被取候而

上御申候、一色月庵御くわい持参候、其後下地

の御酌人<sup>ニ</sup>被渡候、御さかつき自庵御給候、三ツメ<sup>ニ</sup>

おりの御肴 上いさまより被下候、重而二ツ

御給候を北条氏照其盞被給置候、

## 三献

御盞之台参<sup>むすひ花、</sup>おり<sup>二合牛房、</sup>

其後御銚子参、御三ツ被召上候処、おりの御さかな

月庵御進上、御四ツめし上られ候処<sup>（二色直朝）</sup>、又御くきやう

の御さかな進上御申候、其後御盞自庵<sup>（義直）</sup>被下候、

同 上いさま御酌にて被下候、御くわひ一色宮内太

輔持参候、三ツ御給候を、御くきやうの物御さかなを

自庵<sup>（氏照）</sup>御はさ<sup>（松前昌壽）</sup>被下候、重而二ツ御給候、其ま、

御銚子をハ北条陸奥守参候而請取被申候、自庵の

さかつき一色月庵<sup>（大）</sup>廻さし、其廻さし<sup>（義直）</sup>壽首座<sup>（氏照）</sup>

其次一色宮内太輔、其次町野備中守、其次氏照<sup>（氏照）</sup>

廻さし候間、御銚子をハ一色宮内太輔被相渡候、

氏照之次一色右衛門佐、其次高太<sup>（氏照）</sup>和守已上此分<sup>（大）</sup>候、

右、自庵御進物一束一本、御草帟<sup>（大）</sup>御進上、

御奏者北条陸奥守氏照ト云、翌日<sup>（大）</sup>為御使節

一色月庵被遣、其模様、段子三卷、唐之盆<sup>（大）</sup>置

自庵<sup>（大）</sup>被遣候、

一、御荷用之人数、一色中務太輔・小笠原兵庫頭・

同八郎・高修理亮<sup>（氏照）</sup>・印東次郎左衛門尉・同大膳亮

右のような記録であるが、これは「義氏様御代之中御書案之書留」（以下「書留」と略す）と記された一冊の中に収められているものである。この「書留」については佐藤博信氏によって、東京大学史料編纂所所蔵の謄写本「喜連川家文書案」四冊のうちの二冊に相当する原本であり、江戸時代初期に作成されたものと評価されている<sup>8</sup>。この「書留」は二十種×十五種の大きさで表紙及び裏表紙とも欠けている様であり、現在は全体で二十六枚となっている。そして「対面次第」は、「書留」の二十五枚目の裏から二十六枚目の裏にかけて記されており、かつ後關とも思える状態である。そのため「対面次第」を用いて稿を進める立場としては、この記録が重要な記述を脱落させていないか、つまり使用に耐え得るかを検討する必要が生ずる。次にその点を検討していくことにする。

前に掲げた様に、「対面次第」は飛鳥井自庵が古河公方足利義氏と対面した時の三献の様子、そして自庵から公方義氏への進物とそれに対する義氏からの返礼、および対面時の「御荷用」の人々を記

している。酒宴については三献それぞれの膳や杯の品々が記されている。酒宴においては肴物や吸い物を出し酒をすすめ、その後肴物の膳や杯が元に戻ることを一献といい、このような方法で酒をすすめていくが三献までが饗宴の次第の一つの区切りをなすとされ、これを正式の宴会の形としているので、特に式三献と称し、また三献の儀とも称するという。<sup>9)</sup>前にみた通り「対面次第」は三献の様子を記しており、この時の酒宴の様子をほぼ忠実に記録しているものと考えて良いだろう。また自庵の進上物と、それに対する対面の翌日になされた義氏からの返礼物および使節をも記している。登場人物の点でも公方の後見人である北条氏照・御一家一色氏、そして古河公方の奉行人各氏族がみえ、とりわけ天正十年代の「連判衆」七人のうち、松嶺昌寿（寿首座）・一色右衛門佐氏久・町野備中守・高和守（代替わりしたと考えられる高修理亮氏師もみえる）・小笠原兵庫頭氏長の五人がみえるのである。残りの築田助実・三伯昌伊の二人がみえないということは、荷用の氏族も含め、この当時の古河公方関係史料に見える奉行人のほとんどの氏族が記されているのである。このようなことから、この「対面次第」は現状は後關の状態ではあるが、現在残っている部分だけでも内容的には、この時の対面の様子をほぼ忠実に闕落なく記録して伝えているものと評価できよう。すなわち「対面次第」は、これをもとに検討を進めても問題がないものといえるのである。

以上の評価により、以下「対面次第」を用いて検討を進めることにする。

## 二 飛鳥井自庵とその下向について

前にみたように「対面次第」は使用に耐え得る記録であることが明らかになった。そこでここでは、公方義氏と対面した飛鳥井自庵とその下向時期等について若干検討してみることにする。

まず最初に飛鳥井家について述べるが、この家は藤原氏花山院流で難波頼経の子雅経を祖とする堂上羽林家であり、歌・鞠の師範家である。<sup>10)</sup>また、飛鳥井雅縁―雅世―雅親―雅康の数代に涉って歌・鞠師範家として特別の処遇を得ていたという。そしてこれは、当家が足利義教以来の將軍家の両道師範家という地位によるものであったという。<sup>11)</sup>十六世紀後半の飛鳥井家の当主は雅春（雅教）―雅敦―雅庸（雅枝）の三代である。一方「対面次第」にみえる飛鳥井自庵は、飛鳥井家の家譜・系図類に全く見えない人物である。この他「対面次第」に見える一色直朝（月庵）と関係がうかがわれる飛鳥井氏としては、直朝の和歌を褒めこれと交流があった飛鳥井重雅が<sup>12)</sup>いる。この人物は、この他直朝に「物語」<sup>13)</sup>したりする関係であったが、これも飛鳥井家関係の家譜・系図類に全く見えないのである。飛鳥井家においてはほぼ「雅」の一字を名前の上の一字に使っている。特に当主は必ず上の一字に用いている。この点からは、「重雅」なる人物は飛鳥井家の中でも庶流の人物と言えそうである。「重雅」を出家名と考えてみても、飛鳥井家当主の各代の出家名はそれぞれ明らかであり、これを出家名とする当主はいない。この点からも、この人物は飛鳥井家の中でも庶流の人物であったと言えるだろう。この重雅は天文頃に一色直朝と交流があった人物で、後に

明らかにされるが、「対面次第」の時期である天正初期とはやや時期が離れているが、全く考えられないほどの時間差ではない。『驚宮町史』史料四がとりあえず比定したように、重雅||自庵ということを否定はできない。天文頃からの関東との関係から天正期の対面に至ったとも考えられるのである。こういったことから、本稿でも重雅||自庵ということを、今後の詳細な検討の必要を明記しながら一つの可能性として掲げることにする。

次に、飛鳥井自庵がいつ下向したのかを考えてみたい。「対面次第」は、単に五月五日に自庵が古河公方足利義氏の御前に参上し対面したとしか記していない。飛鳥井自庵が未だ人物比定の点で検討の余地がある状況から、この対面は、古河公方側の登場人物からその年代比定を行なう以外はない。まず時期の下限は、足利義氏が天正十年閏十二月二十日（三島暦）に没しているので天正十年となる。上限は現在のところ、北条氏照が本文中で「陸奥守」と記されていることから見ていくことになるが、氏照は天正二年十二月十二日付の北条家朱印状では「源三」<sup>(14)</sup>と見え、「陸奥守」を称する確実な史料は天正四年九月十六日付の北条氏照書状が初見である。その他の登場人物からは、この氏照の名乗りの変化から見た上限を狭めることはできない。従って自庵の対面は天正三年から同十年までの間となる。古河公方体制の最末期といって良いだろう。

さてここでは、この自庵の下向・自庵と義氏の対面で活躍したの誰かということを考えてみる。「対面次第」を見てみると、多くの人物が参りまた荷用をしているが、その中で一色直朝だけが義氏と自庵以外では、ただ一人三献すべてに関係している。また対面の

翌日に公方の使節として自庵のところへ遣わされているのである。この対面のときの一色直朝の役割には特別なものがあると考えて良いだろう。つまり今回の対面で最も活躍し、義氏と自庵を結びつけたのは一色直朝であったと考えて良いのではないか。この一色直朝は前にも述べたように、天文頃に飛鳥井重雅と和歌の面で交流があり、その他聖護院道増・三条西実枝・冷泉明融等の京都の文化人とも和歌を中心とした交流があった人物である。また飛鳥井家は和歌の師範家であり、こうした一色直朝の京都文化人との交流をふまえて自庵の関東下向、義氏との対面となったのだろう。そして佐藤氏も述べているように、この対面は一色直朝を介して行なわれたと考えて良いだろう。付言するならば、この対面時に自庵は義氏に対して「御草席（大抵）諒（藤原定家の歌論書）」<sup>(15)</sup>を進上している。こうした一色直朝の存在によって自庵と義氏の対面が成立したと考えられるが、本稿では、これまで述べられていないもう一つの飛鳥井家と一色氏の関係について紹介する。

飛鳥井家には「飛鳥井家譜」<sup>(19)</sup>なるものがあるが、天文十七年（一五四八年）に生まれたと考えられる雅敦（雅春子）<sup>(20)</sup>についてその母が「一色五郎屋形女」であると記されている。また雅敦の弟である龍雲にも「号一色」と記されている。この「一色五郎屋形」というのはもちろん京都一色氏である。京都一色氏には、その嫡流家と言える丹後・伊勢等の守護及び侍所頭人を務めた一色氏と幕府奉公衆となった一色氏が存在するが、「五郎」を称するのは前者の嫡流家の一色氏である。十六世紀頃の一色氏の系譜はほとんど不詳であるが、永正十四年（一五二七）におきた丹後国内の戦乱において当時

同国守護であった一色義清が「五郎」を称したことが見える。<sup>(21)</sup>飛鳥井雅敦の母である人物は、この五郎義清か、その子(次代)<sup>(22)</sup>の所生の人物となるだろう。飛鳥井家は京都一色氏嫡流家と婚姻関係を結んでいたのである。京都一色氏との関係とはいえ、その同族である関東一色氏の存在は飛鳥井自庵の関東下向になんらかの契機・役割を果たしたものと考えられる。婚姻関係及び一色直朝の京都文化人との交流<sup>(24)</sup>があって、飛鳥井自庵の関東下向がなされたと考えられるのである。

飛鳥井自庵の人物比定やその下向時期・契機等といったことをこれまで考えてみたが、次に再び「対面次第」そのものの検討に戻り、対面時の御前の座次等を明らかにしていくことにする。

### 三 対面時の座次と「連判衆」の身分序列

ここではまず、足利義氏と飛鳥井自庵が対面したときの古河公方家臣の座次の復元を行なってみる。前に掲げた〈史料〉を見ながら考えて行くことにする。

座次の復元に有益な情報を与えてくれる三献の場面で注目するのは、銚子とさかずきの移動である。まず銚子については、足利義氏のもとへ北条氏照が「参」って「請取」り、そして自身にさかずきが廻ってきたときに一色義直(宮内大輔)に「相渡」している。一方さかずきの方は義氏から自庵へ下され、その後、一色月庵(直朝)・松嶺昌寿・一色義直・町野備中守・北条氏照・一色氏久・高大和守と廻されている。まずさかずきの移動から座次を考えてみるが、一色月庵以下の七人が公方の御前に縦一列或いは横一列に並ん

で座っていたとは考えにくいので、主居・客居(左・右)に一列ずつ並んで座っていたと考えて良いだろう。この七人をさかずきの廻った順に主居・客居に分けて座らせると、九十七頁の①・②の二つのパターンがまず考えられる。

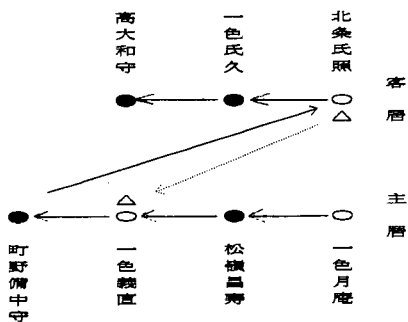
この七人のうち松嶺昌寿・町野備中守・一色氏久・高大和守の四人は「連判衆」である。残りの三人は、この四人とは異なる身分であり御一家衆といってよい人物である。①・②の両方の座次のパターンとも、「連判衆」が主居・客居に分かれて座ることになり、また御一家衆と「連判衆」が入り乱れて座ることになる。また銚子も客居側から主居側へと、「相渡」したという記述に相応しくないほどの移動をすることになる。

このような不都合な点をクリアする座次はないだろうか。そこで考えられるのが、さかずきが主居・客居に交互に千鳥掛けに移動するパターンである(③・九十八頁)。

この座次のパターンでは、主居の側に御一家衆が並んで座り、客居の側に「連判衆」が並んで座ることになる。御一家衆と「連判衆」が、主居と客居のそれぞれの側にはっきり分かれて座ることになる。このパターンは、前の①・②のように御一家衆と「連判衆」が入り乱れて座るパターンよりは可能性が高いだろう。またこの座次においては北条氏照と一色義直が隣り合って座ることになり、銚子を「相渡」した行為に適合していると思う。尚、高大和守はさかずきの廻り方からいくと北条氏照の下座となるが、これは高大和守の家柄から「連判衆」の側に座っていたと考えて良いだろう。このように③の座次のパターンは、「対面次第」の記述と家柄・出自の

①

上座



[凡例]

● 頼氏期連判衆(執政衆)

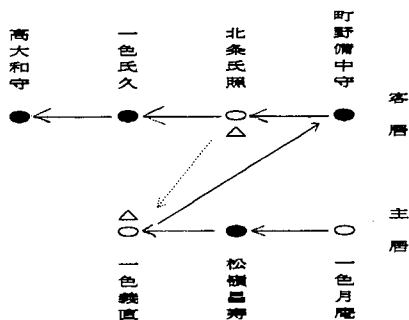
さかずきの廻り方



鈍子とその移動

②

上座



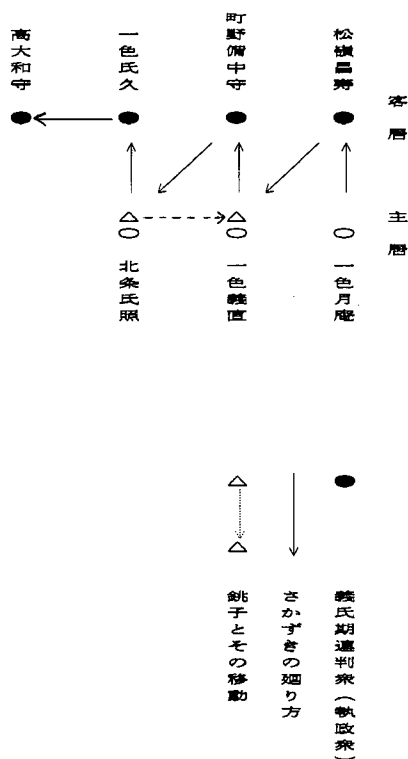
区別の点から、これに合致する座次といえる。

これまで、古河公方の御前において御一家・家臣層(「連判衆」も含む)がどのような座次で座っていたかについては、残された僅かな記録においても、「殿中御前」・築田・一色・佐々木・梶原・印東以下祇候<sup>(25)</sup>、「御前祇候之面々」・築田・一色・野田・佐々木・梶原以下<sup>(26)</sup>といった程度の記述しか見えず、具体的な座次についてはこれまで不詳であった。この③の座次のパターンが明らかにされたことにより、「宿老中」筆頭築田氏が公方義氏に屈伏した後である天正前期という時点の儀式におけるものと限定はされるが、初めて公方の御前の座次が解明されたのである。この座次で「連判衆」の第一位を占めている松嶺昌寿は、義氏期に単独の奏者となった芳春院周興の跡を継いだ人物であり、「連判衆」の筆頭と評価されている人物である<sup>(27)</sup>。この自庵と義氏の対面時における「連判衆」内の相対的な身分序列は、この松嶺昌寿を筆頭に以下、町野備中守・一色氏久・高和守、そして小笠原氏長<sup>(29)</sup>(「荷用衆としてみえる」<sup>(28)</sup>)という序列になるだろう。ある時点の相対的な身分序列であるとはいえ、それを初めて明らかにすることができたのである。

③

上座

〔凡例〕



おわりに

天正前期に行なわれた飛鳥井自庵と古河公方足利義氏の対面を記した「飛鳥井自庵参上対面次第」の検討を中心に、若干の考察を行なってみた。その考察ではまず、この「対面次第」の史料価値の検討を行ない、また飛鳥井自庵の関東下向の時期・契機等を考え、そこでは飛鳥井家と京都一色氏の間に婚姻関係が存在していたことを明らかにした。そして「対面次第」の三献時の記述から、公方義

ういった課題を明記し欄筆する。

註

(1) 佐藤博信氏の古河公方に関する研究は、同氏の「古河公方足利氏の研究」(校倉書房・一九八九年)および「中世東国の支配構造」(思文閣出版・一九八九年)にほぼ収められている。市村高男「古河公方の権力基盤と領域支配」(『古河市史研究』第十一号・一九八六年)。長塚孝「古河公方足利氏と禅宗寺院―旧利根川下流域を中心に―」(『三郷市史研究・葦のみち』第二号・一九九〇年)。

(2) あるいは「執政衆」ともいってよいだろう。

氏の御前においてどのような座次が存在していたのかを復元してみた。そしてそこにみられる「連判衆」内の相対的な身分序列をも明らかにした。これにより、天正前期の儀式におけるものと限定はされるが、古河公方足利義氏期の御前における座次や、これまで一括して論じられることの多かった「連判衆」内における相対的な身分序列を初めて具体的に明らかにすることができた。しかし残された課題も多い。まず飛鳥井自庵の具体的な人物比定と、この対面の行なわれた時期の確定が挙げられる。また本稿で明らかにした相対的な身分序列の一般化も重要な課題である。そしてそのことにも大いに関係する「連判衆」による文書の発給における連署の法則といったことも考察すべき課題であると考えている。その他、初献から三献までに出された肴物の種類・特徴・生産地等の検討も欠かせないものだろう。こ

(3) 「連判衆」の職掌等については、佐藤博信氏が「古河氏姫に関する考察」(『古河公方足利氏の研究』所収)で少々述べられている。

(4) 「連判衆」の相対的身分序列については、長塚孝氏が「古河公方家臣の書札札と序列」(『戦国史研究』第十四号・一九八七年)において考察をされているが、氏の書札札の評価といった点で検討の余地があるように思える。本稿ではその相対的身分序列を若干検討するが、長塚氏の説の再検討を含んだ、文書発給時の連署の法則からみた身分序列の検討については別稿を考えている。

(5) 佐藤博信「古河公方周辺の文化的諸相—古河公方研究の深化のために—」(『三浦古文化』第四十九号・一九九一年)。

(6) その他、『鷲宮町史』史料四でも翻刻されている。

(7) 筆者自身の調査により、字句はこれまで活字化されていたものを一部改めている。また人物比定についても、これまで町野備中守について「義俊」が比定されてきたが、その名乗り方からそのようには比定せず、本稿では具体的な人物比定は行なわなかった。この古河公方家臣町野氏の研究も今後の重要な課題と考えている。

尚、史料の字くばり・改行については忠実に再現した。

(8) 佐藤博信「義氏様御代之中御書案之書留」(『古河市史研究』第八号・一九八三年) 参照。

(9) 『国史大辞典』第六巻・「式三献」の項(倉林正次氏執筆)。

(10) 『尊卑分脈』第一篇・二三三頁、『国史大辞典』第一巻・「飛鳥井家」の項(今泉淑夫氏執筆)。

(11) 今泉淑夫「文明二年七月六日付飛鳥井雅親書状案をめぐって」(『日本歴史』第三六九号・一九七九年) 参照。

(12) 赤瀬信吾翻刻「桂林集注」(『京都大学国語国文資料叢書』三十二・臨川書店・一九八二年)の十八・三十五・六十三番目の歌。

尚、一色直朝と飛鳥井重雅をはじめとする京都文化人との交流の様子については、『鷲宮町史』通史・中巻の「一色直朝」についての項(五六三

頁)五八二頁・富田勝治氏執筆)および、前掲註(5)の佐藤氏論文参照。

(13) 『月庵醉醒記』(『古典文庫』第四一五冊・古典文庫・一九八一年)一〇五頁。

(14) 『戦国遺文』後北条氏編 一七五二号・一七五三号。

(15) 『戦国遺文』後北条氏編 一八七四号。尚、長塚孝氏の「戦国武将の官途・受領名—古河公方足利氏と後北条氏を事例にして—」(『駒沢史学』第三九・四十合併号・一九八八年)も参照した。

(16) 前掲註(12) 参照。

(17) 前掲註(5) 論文参照。

(18) 『国史大辞典』第二巻・「詠歌大概」の項(田中裕氏執筆)。

(19) 東京大学史料編纂所謄写本に依った。請求番号 四一七五—一五一および四一七五—一三三。

(20) 『兼見卿記』第一(『史料纂集』所収・統群書類従完成会)の天正六年(一五七八)八月六日条に、雅敦が三十一歳で同日に没したことが記されている。また、『公卿補任』第三篇でも同様に記している(「八月七日薨」とあるが)。尚、『飛鳥井家譜』には天文十六年(一五四七)に生まれたと記されている。

(21) 「東寺過去帳」(東京大学史料編纂所写本(巻数本)に依った。請求番号 四〇四三—一)。今谷明「室町・戦国期の丹後守護と土豪」(同氏著『守護領国支配機構の研究』所収・法政大学出版局・一九八六年) 参照。

(22) 永正十四年当時、義清は「左京大夫」を称している(『朽木文書』第一八十九号・『史料纂集』古文書編所収・統群書類従完成会)。

(23) 時期および状況は全く異なるが、高橋修氏は一色義貫の誅殺の理由について、関東一色氏の反幕府行動と義貫が足利持氏の残党(関東一色氏)との通謀を疑われたためとの見解を示されている(「足利義持・義教期における一色氏の一考察—一色義貫・持信兄弟を中心として—」、『史学研究集録』第八号・一九八三年)。飛鳥井氏が姻族の一族の関東における存在

を意識していたことは、充分考えられることなのである。

(24) この他、歌・鞠の師範家としてその家職を利用することを目的として下向したとも考えられるが、このことは今後の検討課題としておく。尚、富田正弘氏の「戦国期の公家衆」(『立命館文学』第五〇九号・一九八八年)を参照。

(25) 「松陰私語」第一 八〇一頁(『群馬県史』資料編五)。

(26) 「松陰私語」第四 八三五頁(『群馬県史』資料編五)。尚、註(25)。

(26) の史料とも、古河公方の全盛期といえる十五世紀後半のものであり当該期とは状況が異なる。

(27) 佐藤博信「足利晴氏・義氏とその時代―後北条氏との関係を中心として―」および「古河氏姫に関する考察」(ともに『古河公方足利氏の研究』所収)。

(28) 同じく荷用衆として高氏師もみえる。ただしこの人物は、高和守の跡を継いで「連判衆」となった人物と考えられるので、この当時の「連判衆」の相対的な身分序列の中に位置付けることはできない。

(29) 主居の側に座った御一家衆についてであるが、その第一位に座す一色月庵(直朝)は足利氏御一家であり、かつ前にみた通り飛鳥井家と和歌の点で交流があり、またこれと婚姻関係のあった京都一色氏と同族である。

第二位の一色義直は月庵の子であり関東一色氏嫡流家の当主である。第三位の北条氏照は古河公方足利義氏の姻族であり後見人でもある。

(30) この点については、前掲註(4)で述べた通り別稿を考えている。

〔付記〕本稿で検討した「飛鳥井自庵参上対面次第」の調査(一九九四・三・十六、於喜連川町公民館)に際しては、喜連川町教育委員会事務局・公民館長上野哲男氏をはじめとする多くの方々にお世話になりました。また、加藤秀幸氏にも御教示いただきました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。